

世界遺産登録による経済波及効果の分析 ＝「四国八十八ヶ所」を事例として＝

1. はじめに

日本が世界遺産条約を批准し、法隆寺や姫路城が「第一号登録」となってから12年が経過した。2003年7月現在、世界遺産に登録されている物件は754件あり、その内、日本では11件登録されている。

現在、四国には登録物件はないものの四国四県に点在する「四国八十八ヶ所霊場」を世界遺産に登録する運動が行われている。対岸の尾道市では、今年4月に「世界遺産の登録を究極の目標」とした世界遺産推進課が新設され、尾道の街並みを世界遺産にする運動が展開されている。

「四国八十八ヶ所霊場」が、世界遺産に登録されれば世界的に知名度が向上し四国の新たな観光スポットになることは間違いなく、大幅な観光客の増加が期待出来る。

観光客の増加策としては、①国策として、ビジットジャパンキャンペーンが打ち出されて、海外から観光客の獲得を2010年までに500万人から倍増させる計画が実行されている。愛媛県としては、②平成16年7月に松山～上海定期便が開通した。

観光客が四国に滞在してもらうためには、世界的に知名度のある観光資源を開発する必要がある。

この研究では、日本における世界遺産に登録された物件を事例として、登録されたことにより地域に観光面でどのような経済効果等をもたらすかを調査した。

2. 四国八十八ヶ所霊場について

(1) 四国八十八ヶ所霊場の起源

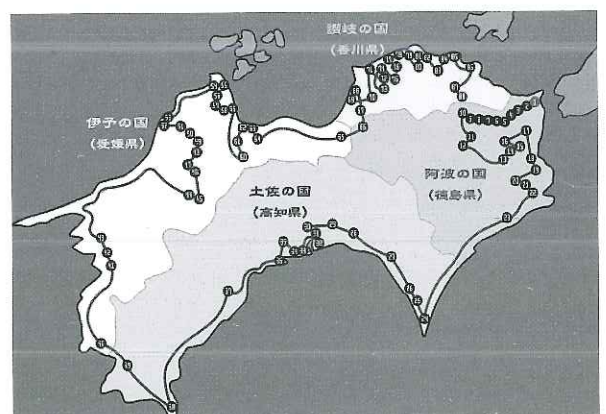
「四国八十八ヶ所霊場」は、弘法大師空海が、自信の修練と人々の災難を除くために開いた霊場であり、弘法大師が42歳の頃の事跡が多いことから弘仁6年

(815年)に開創されたと伝えられている。

「四国遍路」とは、その八十八ヶ所霊場を巡る旅で、起源は伊予の国の荏原村（松山市恵原町）の長衛門三郎が自身の非を悟り、弘法大師の後を追って四国を巡ったのが始まりと言われている説と、弘法大師の入定後、高弟の真済が弘法大師の足跡を遍歴したと言われている説がある。いずれにしても弘法大師が入定後、弘法大師に対する信仰が起り、平安末期から今日まで約1200年に渡り、弘法大師ゆかりの地を巡礼する歴史を積み重ねてきている。

四国八十八ヶ所霊場は、阿波の国（徳島県）「発心の道場」、土佐の国（高知県）「修行の道場」、伊予の国（愛媛県）「菩提の道場」、讃岐の国（香川県）「涅槃の道場」からなり、88は人間の煩惱の数と言われ、四国霊場八十八ヶ所霊場を巡ることにより、煩惱が消えて願いが叶うとされている。

図表2-1 四国八十八ヶ所霊場の位置



(四国一周八十八ヶ所巡りのHPより)

(2) 四国八十八ヶ所霊場を世界遺産に

市民団体「えひめ地域づくり研究会」は、1998年1月に「四国遍路文化を世界文化遺産に登録する運動を始める」という決議を行い活動を開始した。

図表2-2 「紀伊山地の霊場と参詣道」「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路(スペイン)」「四国八十八ヶ所霊場」の比較

比較項目	「紀伊山地の霊場と参詣道」	サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路(スペイン)	四国八十八ヶ所霊場
世界遺産登録年	2004年	1993年	—
遺産種別	文化遺産	文化遺産	—
関係市町村	3県29市町村	5自治州166市町村	4県48市町村
構成遺産の範囲	参詣道延べ約400km・史跡7件、史跡・名勝1件、天然記念物4件	巡礼路延べ約800km・歴史的建造物1,800件超、巡礼路本ルート「フランスの道」	巡礼路延べ約1,300km・国宝2件、重要文化財10件(建造物・建築物)
構成遺産の内容	「吉野・大峯」、「熊野三山」、「高野山」の3霊場及び、これらを結ぶ「参詣道」	「フランスの道」、歴史的建造物(「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」)	阿波国・土佐国・伊予国・讃岐国の四国を一周する巡礼路
自然環境・景観	紀伊山地の3つの霊場とそれらに向かう参詣道が対象となっている。建造物等は木造であり、跡地のみが残っている個所も多い。	ピレネー山脈を2つの峠から越え、スペイン北部内陸を西に向かって巡礼路が延びている。建造物等は石造りであり、発掘調査などにより当時の姿に修復が行なわれているものもある。	四国4県に点在する四国八十八ヶ所霊場に向かう巡礼路が対象となっている。建造物は木造であり、中には国宝の建造物も含まれる。
交通	徒歩、自動車、バスによる訪問可能	徒歩 自転車 自動車、バスにより併用可能	徒歩 自転車 自動車、バスにより併用可能
構成遺産の特徴	紀伊山地は4世紀頃から神々が宿る特別な地域と考えられるようになった。紀伊山地には北部に空海が唐から導入した真言密教の霊場「高野山」と日本固有の山岳宗教である修験道の霊場「吉野・大峯」、南東部には自然崇拜に起源する神道の霊場「熊野三山」と言うように、世界にも珍しい3種類の霊場が形成された。	キリスト教12使徒の1人である聖ヤコブ(スペイン語名サンティアゴ)の墓が9世紀初頭、スペイン北西部サンティアゴ・デ・コンポステーラで発見され、それ以来、ローマ、エルサレムと並び、このサンティアゴがヨーロッパ三大巡礼地の一つとして崇められ、キリスト教信者の心の拠り所となった。	今からおよそ1200年前に弘法大師空海が修行され、人々から災難を除くために開いた、由緒ある霊跡である。人間には88の煩惱があり、四国霊場八十八ヶ所霊場を巡ることによって煩惱が消え、願いが叶うといわれている。全行程約1,300kmの四国を一周する巡拝は、自分自身を見つめ直す修行の旅である。
宿泊施設	霊場及びその周辺には宿泊施設がある。宿泊施設の中には温泉を有しているものもある。参詣道沿線には大きな町や宿泊施設は皆無であり、かつての王子(休憩所など)は朽ち果てている。	スペイン政府出資によるホテルチェーンであるバラドールがスペイン全土に86箇所、また安価なホテルも数多くある。巡礼路沿いにはホテルの他に保護所が数多くあり、巡礼者は無料で宿泊出来る。	霊場及びその周辺には宿泊施設がある。中には善根宿といって無料で宿泊させてくれるところもある。
近隣の世界遺産	「法隆寺の仏教建造物」「古都奈良の文化財」「古都京都の文化財」	「フランスのサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」「サンティアゴ・デ・コンポステーラ(旧市街)」「アストゥリアス王国の聖堂建築」「アルタミラ洞窟」「ブルゴスの大聖堂」	「原爆ドーム」「厳島神社」
特記事項	修験道の霊場へ向かう参詣道(多神教世界)	キリスト教のための巡礼路(一神教世界)。	霊場へ向かう巡礼路

参考：和歌山経済研究所「紀伊山地の霊場と参詣道」と類似した世界遺産の現況

「巡礼路」という点において世界遺産を調べてみると、「サンティアゴへの道」（パリを出発点にサンティアゴ・デ・コンポステーラを最終地とする巡礼路）が世界文化遺産に登録されている。また、日本においても、「紀伊山地の霊場と参詣道」が今年世界遺産に登録された。

四国八十八ヶ所霊場においても、①世界でも珍しい広域ルートの巡礼路である。②周囲を取り巻く「文化的景観・歴史的景観」を特色としているなど共通する部分があり、世界に知られるべき価値はおおいにあると考えられる。

3. 世界遺産とは

(1) 世界遺産とは

世界遺産とは、1972年のユネスコ総会で採決された「世界遺産条約」に基づいて、「世界遺産リスト」に登録された自然や文化のことであり、世界遺産リストの作成目的は、地球にある素晴らしい自然や文化を、国や民族の区別なく、全地球人のものとして守っていくところにある。特に、消滅や崩壊の危機に瀕する自然や文化財を守り、未来に受け継ぐということが最大の目的であると言える。しかし、世界遺産は単に自然保護、文化財保護のためだけではなく、例えば世界遺産に登録されたものを知れば、その国の文化・産業・技術・歴史・自然景観やそこで生活している生き物の姿までもが見えてくる。世界遺産は、お互いの国を知り合う格好の手段にもなり得る。世界遺産の最大の特徴は、自然と文化を一つの条約の下で一緒に守っていくところにあり、これまで別々のものとして捉えられてきた自然と文化が実は、密接に係わりあっているのだろうという新しい考えの下、世界遺産は生まれたものである。

(2) 自然遺産と文化遺産

世界遺産は大きく分けると、「自然遺産」と「文化遺産」に分けることができる。

「自然遺産」とは、鑑賞上、芸術上、保存上顕著な普遍的価値を有している地形や生物、景観などを含む地域のことを指し、「文化遺産」とは、普遍的な価値を

有している記念工作物、建造物、遺跡のことを指す。2003年7月現在、世界遺産リストに登録された自然遺産は149、文化遺産は582、両方にあてはまる複合遺産は23である。その内日本で登録されたのは自然遺産2ヶ所、文化遺産9ヶ所四国八十八ヶ所霊場が世界遺産に登録されることになると文化遺産に該当すると考えられる。

図表3-1 日本の世界遺産の登録状況

(2003年7月現在)

日本の世界遺産	
自然遺産	白神山地、屋久島
文化遺産	姫路城、法隆寺地域の仏教建造物、古都京都の文化財、古都奈良の文化財、日光の社寺、白川郷・五箇山の合掌造り集落、原爆ドーム、厳島神社、琉球王国のグスク及び関連遺産群

4. 世界遺産登録先の観光客数の推移

世界遺産登録先（2003年7月現在）が世界遺産に登録されることによってどのように変化していったかを調査した。

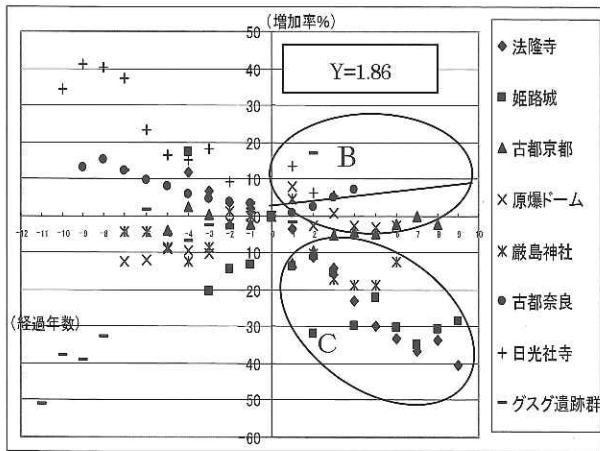
(1) 世界遺産登録先の観光客数の推移

図表4-1 世界遺産登録先の観光客数の推移 (千人)

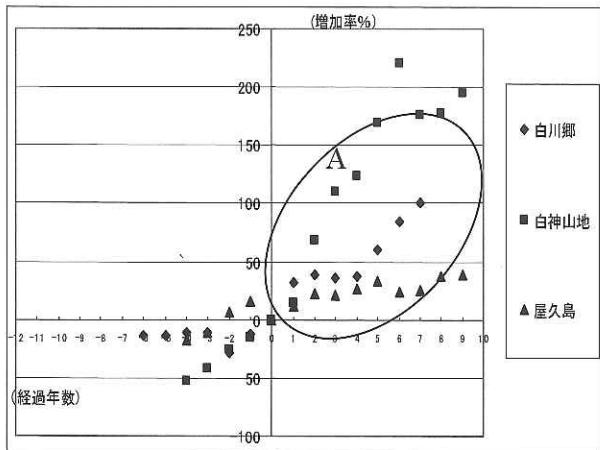
	法隆寺	姫路城	白神山地	屋久島	古都京都	白川郷	原爆ドーム	厳島神社	古都奈良	日光社寺	グスク遺跡群
1988年	1,153	1,197	101	171	54,746	680	8,306	2,849	14,671	7,711	3,280
1990年	1,100	811	124	187	58,542	668	8,342	2,854	14,934	8,105	4,155
1991年	1,070	871	159	222	57,317	664	8,631	2,727	14,544	8,048	4,072
1992年	1,050	885	181	242	55,731	686	8,613	2,605	14,200	7,882	4,505
1993年	1,030	1,020	212	209	55,673	555	8,541	2,718	13,982	7,068	7,522
1994年	992	883	243	233	57,040	671	9,334	3,014	13,751	6,686	6,804
1995年	916	695	356	257	49,682	771	9,304	2,893	13,546	6,619	6,347
1996年	883	861	444	253	51,764	1,019	9,494	2,980	13,468	6,788	6,230
1997年	792	716	475	264	54,036	1,074	10,235	3,119	13,392	6,260	6,541
1998年	721	792	570	280	54,967	1,047	9,259	2,681	12,961	5,838	6,539
1999年	687	713	678	260	54,450	1,060	9,581	2,475	13,060	5,737	6,931
2000年	651	662	585	263	55,689	1,237	9,252	2,423	13,261	6,514	6,702
2001年	685	708	589	286	56,986	1,423	9,233	2,416	13,603	6,105	6,568
2002年	615	729	624	290	55,835	1,545	9,259	2,609	13,899	6,041	7,825

参考：各県・市町村にてヒアリングにて作成
 ・白神山地の観光客数は青森県の「赤石溪流暗門の滝」の観光客数
 ・古都京都の観光客数は、京都市・宇治市・大津市の観光客数を合計したもの
 ・原爆ドームの観光客数は、広島市の観光客数
 ・古都京都の観光客数は、奈良市の観光客数
 ■ は世界遺産登録年度

図表 4-2 観光客の増減率の推移



(注) 世界遺産登録年を基準とし、増減率を出したもの。例：経過年数1は「世界遺産登録後1年目」、経過年数-1は「世界遺産登録1年前」



○タイプA (登録により急増したもの)

■白神山地 ■屋久島 ■白川郷 ■グスク遺跡群
世界遺産登録後も高水準で観光客が増加しているタイプ

〔特徴〕

1. 世界遺産登録されるという気運が高まり全国的な観光地として確立された。
2. 人里離れているところに存在するものが多い。

○タイプB (概ね堅調推移しているもの)

■古都京都 ■原爆ドーム ■古都奈良 ■日光社寺
世界遺産に登録後、概ね堅調に推移しているタイプと世界遺産に登録されるまで観光客が減少していたが、世界遺産に登録されることにより下げ止まり観光客が増加傾向にあるタイプ

〔特徴〕

1. 以前より全国的に有名な観光地である。
2. 広範囲に点在している所が多い。

○タイプC (登録後も減少しているもの)

■法隆寺 ■姫路城 ■厳島神社

世界遺産登録される前から観光客が減少し、世界遺産登録後も減少しているタイプ

〔特徴〕

1. 以前より全国的に有名な観光地である。
2. 単独で存在している。

(2) 四国八十八ヶ所霊場が世界遺産に登録された場合の観光客の伸び率

四国八十八ヶ所霊場の内、愛媛県内にあるのは26霊場(40番から65番)で、世界遺産に登録されることを想定すると、

①四国八十八ヶ所霊場は、観光地としてではなく巡礼の場として全国的に有名であるが、国宝2件・重要文化財10件(建造物・建築物)を有しており、観光客の増加も期待できる。

②愛媛県内に広範囲に点在している。

等の要因により、タイプB程度の観光客の増加率は期待出来る。

タイプBの中でも、四国八十八ヶ所霊場に類似しているのは「古都京都」と「古都奈良」である。四国八十八ヶ所霊場の特徴は地方分散型であり都市分散型の古都京都よりも地方分散型の古都奈良の方がより適合する。したがって本調査では古都奈良のデータを採用し四国八十八ヶ所霊場が世界遺産に登録された時の最大増加率を1.86%とする。

※1 タイプB(古都奈良)の世界遺産登録後の観光客増加率は、 $Y=1.86$

(Yは増加率)

5. 愛媛県の観光動向

(1) 愛媛県の観光客数

図表5-1 愛媛県の観光客数

(単位:千人)

年別	県外観光客計	県外観光客発地別					県内観光客計	合計
		近畿	中国	九州	四国3県	その他		
1994年	6,654	1,744	1,197	822	1,381	1,510	12,784	19,438
1995年	6,478	1,413	1,245	816	1,448	1,556	13,293	19,771
1996年	6,632	1,519	1,249	833	1,507	1,524	13,765	20,397
1997年	6,523	1,531	1,204	811	1,445	1,532	14,119	20,642
1998年	6,549	1,657	1,135	833	1,370	1,554	14,498	21,047
1999年	11,173	2,781	2,933	1,041	1,752	2,666	15,296	26,469
2000年	8,836	2,236	1,793	938	1,542	2,327	14,884	23,720
2001年	8,584	1,846	1,762	949	1,540	2,487	14,873	23,457
2002年	8,517	1,980	1,762	938	1,546	2,291	15,352	23,869
2003年	8,839	1,925	1,725	970	1,680	2,539	15,353	24,192

引用：平成15年観光客数とその消費額(愛媛県観光協会)

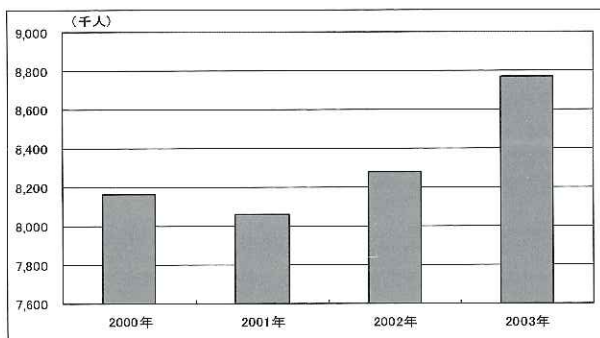
愛媛県の観光客数は、2003年24,192千人(延べ)と推計され、前年の23,869千人(延べ)に比べると、323千人(1.35%)の増加となった。

観光客の動向としては、一時期、しまなみ海道開通ブームの反動があったものの、1994年以降、交通網(高速道路等)の整備による移動時間の短縮や長引く不況による手軽な県内観光(日帰り観光)への転換により、概ね順調に推移してきている。

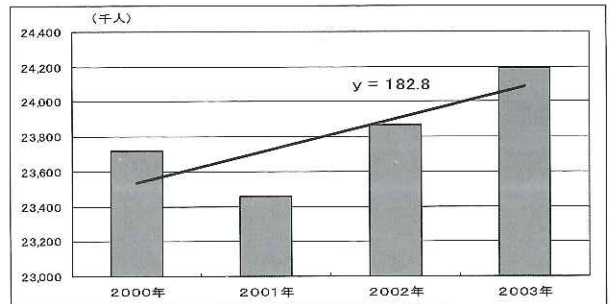
2002年及び2003年に相次いでオープンした温泉施設や道の駅など、観光客の入込みに好影響を与えるとともに、南予への高速道路の延伸効果が持続しているため、観光客数は引き続き高い水準で推移している。

図表5-2 松山地方(道後温泉郷地区)と愛媛県の観光客推移

(A) 松山地区



(B) 愛媛県



参考：平成15年観光客とその消費額(愛媛県観光協会)
(注：1999年は「しまなみ海道」開通という特殊要因から大幅に観光客が増加しているため1999年以後の観光客を参考とする)

四国八十八ヶ所霊場の「お遍路さん」は年間13万人(四国八十八ヶ所霊場会事務所にヒアリング)と言われているが、観光客数は定かではない。

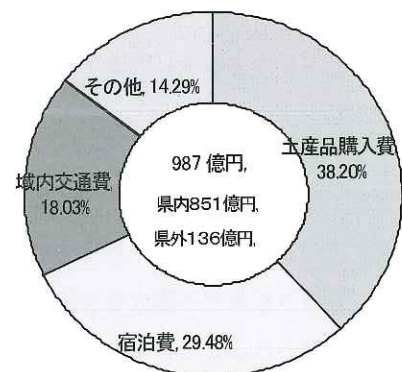
四国八十八ヶ所霊場が8霊場ある松山地区は図表5-2を見てもわかるように愛媛県の観光客動向と類似している。四国八十八ヶ所霊場が世界遺産に登録されると愛媛県内の広範囲に同様の効果が得られると考えられる。

※2 愛媛県の観光客は、毎年182.8千人増加する。

(2) 愛媛県の観光消費額

2003年の愛媛県の観光消費額は図表5-4の通りであり、総額987億円と算出されている。観光消費額内訳は、土産品購入費が約377億円(38.20%)を占め、次いで宿泊費が約291億円(29.48%)、域内交通費が約178億円(18.03%)、その他141億円(14.29%)の順となっている。

図表5-4 観光消費額支出



引用：平成15年観光客数とその消費額(愛媛県観光協会)

※3 愛媛県における観光客1人当たりの消費額は、
 (愛媛県の観光消費額) 987億円 ÷ (愛媛県の観光客
 数) 24,192千人 = (観光客1人当たりの消費額)
 4,080円

(3) 海外との定期航路の開設

愛媛県では1995年に松山～ソウル線の開設により、
 海外からの観光客が直接、愛媛県に来日できるよう
 になった。松山～ソウル線による訪日者数は図表5-5
 の通りである。SARS等による特殊原因を加味すると
 概ね堅調推移している状況である。

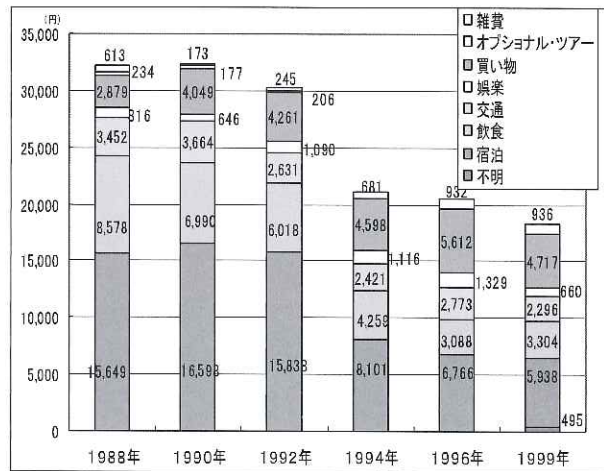
図表5-5 松山～ソウル線 訪日者数 (単位:人)

年度	松山到着		合計	外国人 利用率
	日本人	外国人		
1997年	10,065	4,148	14,213	29.1
1998年	13,755	3,026	16,781	18.0
1999年	12,515	4,447	16,962	26.2
2000年	12,578	4,768	17,346	27.4
2001年	12,220	3,750	15,970	23.7
2002年	11,154	4,889	16,043	30.4
計	72,287	25,028	97,315	25.7

愛媛県においては、今年7月に松山～上海線が開設
 された。利用状況は7～8月の2ヶ月間で搭乗者数は
 2,231人で外国人利用率は8.8% (8月18日付愛媛新聞)
 である。愛媛県交通対策課の当初の試算では利用目標
 は、10,000人を見込んでいる。

図表5-6は来日外国人旅行者1人1費日当たりの
 消費額を示したものでありこれによると、1990年の
 32,297円を上限として、年々減少傾向にある。1999年
 には18,346円 (対1990年比△13,951円) に減少してい
 る。

図表5-6 来日外国人旅行者1人1日当たりの消費額

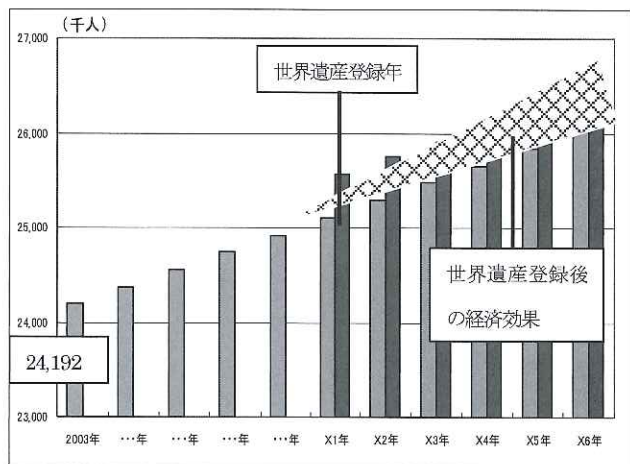


引用：1996年までは、「訪日外客消費額調査」(国際観光振興会)
 により作成。1999年は「訪日外国人旅行の経済波及効果に
 関する基礎調査報告書」(国際観光振興会)により作成。1999年
 以降新たな調査は行っていない。

6. 世界遺産に登録された時の経済効果

以上のような愛媛県の動向を踏まえると、「四国八
 十八ヶ所」が世界遺産に登録されると、下記のような
 経済効果が得られると考えられる。

図表6-1 今後の愛媛県の観光客増加予想と世界遺産登録による観光客数増加



(1) 世界遺産登録後の観光客数(千人)

$$24,192 + 182.8n \leq 24,192 + \text{世界遺産登録後の観光客増加数} \leq (24,192 + 182.8n) (1 + 1.86\%)$$

(2) 世界遺産登録による消費額

$$(24,192 \text{千人} + 182.8n \text{千人}) \times 1.86\% \times 4,080$$

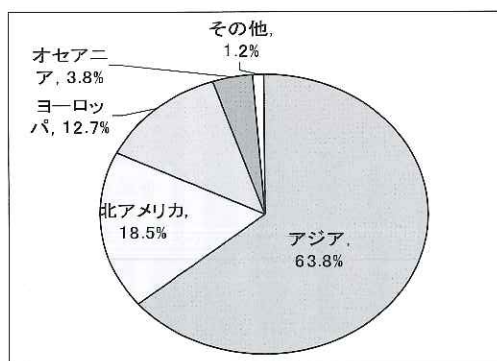
(単位:円)

- ※1 世界遺産登録による観光客増加率 1.86%
- ※2 愛媛県の年間観光客増加数 182.8千人
- ※3 愛媛県における観光客1人1日当たりの消費額 4,080円
- ※4 nは2003年以後の経過年数
- ※5 2003年の観光客数 24,192千人

7. おわりに

四国八十八ヶ所を世界遺産に登録する本来の目的は、「自然と文化財の保護」というところにある。しかし、結果的に日本国内もしくは世界にすばらしい遺産があるということをPRすることにより、愛媛県内の観光客の増加、観光消費額の増加が期待できる。今後、より以上の観光客を増加させるには、いかに外国人観光客を増加させることが出来るかということが課題となってくる。

図表7-1 国籍別訪日外国人旅行者数



引用: 1999年データ、2001年版 JNTO国際観光白書

日本を訪れる外国人観光客は約1,636万人で、アジア地域からが最も多く63.8%で次に北アメリカの18.5%であり、国籍別・目的別訪日外国人旅行者数を見ると「歴史的名所」「郷土料理」を目的に訪日しているアジアからの観光客・欧米からの観光客は高い割

合を占めている。しかし、現状では愛媛県への外国人訪問率は0.6%で少数である。

図表7-3 国籍別・目的別訪日外国人旅行者数

(単位:%)

	アメリカ	イギリス	フランス	香港	中国
大都市/都市の生活	52.8	47.7	57.6	71.5	66.2
テーマパーク等	13.6	11.7	4.7	39.5	17.3
買い物/ファッション	64.3	55.5	55.3	82.5	64.9
寺社・庭園・歴史的名所	50.1	45.9	61.2	42.3	47.1
日本料理・郷土料理	85.1	82.6	80	72.2	67.1
工芸品	19.5	12.5	15.3	11.3	11.6
(複数回答結果総%)	508.5	452.3	476.3	499.5	463.9

引用: 1999-2000年データ、訪日外国人旅行者調査1999-2000

「四国八十八ヶ所」が世界遺産に登録されれば「歴史的名所」「郷土料理」等を目的に愛媛県に来県する観光客も増加すると予想される。また、愛媛県は国際線として松山~ソウル線・松山~上海線が開設されており、アジアからの観光客が直行便で訪日し、「世界遺産観光」をした後、日本国内を旅行することも考えられるし、またその逆も考えられる。

要するに、観光消費額が多い外国人(1人1日当たり消費額18,346円)を取り込むことにより、より大きい経済効果を得ることである。

(当センター研究員 服藤 圭二)